RSS SPACE No.44

日本臨床心理身体運動学会会報第 44 号　　2025 年 6 月 10 日

編集発行　日本臨床心理身体運動学会　会長　山中康裕

【第 77 回研修会・第 48 回講習会】

2024 年 9 月 16 日（月・祝）に浜松市市民協働センター（通称はまこら）研修室において、日本臨床心理身体運動学会　第 48 回講習会及び、第 77 回研修会が、対面及びオンラインのハイブリッド形式で開催されました。当日も様々な議論になりましたが、参加者の 2 名の方からコメントを頂きました。

なお、2024 年 8 月に本学会一般会員の仲間玲子先生（兵庫教育大学）がお亡くなりになりました。2024 年 4 月から体調不良とのことで、休会をされていましたが、急な訃報にびっくりしています。まだお若い先生であり、今後のご活躍が期待されていました。
ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

第 48 回講習会
『親子の視点～千と千尋の神隠しを巡って～』（講師：仁里　文美）に参加して

清水駿府病院　　平田直哉

2024 年 9 月 16 日に浜松市市民協働センターにて行われた第 48 回講習会、仁里先生の『親子の視点～千と千尋の神隠しを巡って～』に参加しました。個人的なことですが、この作品は、映画館が近くにない田舎で育った私が初めて家族で観た映画でした。
講習会では、スライドに映画の 1 シーンが映し出され、1 つ 1 つの描写やセリフ、背景に描かれたものからイメージを膨らませていくことで、登場人物の性格や千尋にとっての「関係」「役割」「仕事」といったものが立体的になっていく、そんなイメージで聞かせていただきました。
その中で 1 つの話題…「早くしなさい（親）」「待って～（子）」というやりとり、うちで何度やっているでしょうか。そして、親の都合や価値観をどれだけ「正しいもの」として子どもを無視しているのか…。その一方で、「親もいっぱいいっぱいで大変なんですよ…」という気持ちも出てきて、ゆとりのなさや、自分がこの世界を生きていく上でいろいろ不安なんだなぁとも思いました。
また、フロアに「自分の 10 最頃の記憶は？」と聞かれ、先生自身のお話を聞かせていただきました。その中で、当時のことをよく覚えていないクライエントがいることや、それを面接の過程で思い出すことがある、といった話をされました。千尋世代が体験している世界の凄まじさをイメージするとともに、これから千尋世代になっていく子どもたち、大人になってからの 10 歳頃、それぞれの時において大切なことや、親やセラピストとしてできること、関わり方はどんなのだろうか、先生の話を聞きながら考えました。
映画公開当時、千尋は 10 歳だから、今は 33 歳くらい…。千尋はどんな大人になっているのでしょ

うか？親になり、仕事もしているのでしょうか？当時の体験は、どのように千尋の中にあるのでしょうか？講習会後、そんなことを思いながらいます。

第 77 回　研修会に参加して

金城学院大学　仁里　文美

今回の研修会に参加して、心理臨床の事例研究において、私たちは何をしているのかについて改めて考えさせられました。臨床の人間は、クライエントの生の“言葉”、つまりセラピストとのやり取りはどうだったのか、などの関わりの“実際の言葉のやり取り”、そしてそれらを通してどのような関係が形成されていき、どう変化していったのかに、注目していることに、です。そしてそれらから浮かび上がるクライエントの物事の捉え方や考え方、人との関わりの持ち方など、また、そこに関わったセラピストの姿勢や態度の在り方、さらにはクライエントの変容などをそこに見出そうとします。

クライエントの話す言葉自体は、面接の経過の中でもあまり変わらないことはよくあります。しかしその言い方や言っているときの態度、セラピストとの距離感や一緒にいる感覚などに、何らかの変化があったのではないでしょうか。人と人とが関わる中で、何かが生じ、そして変わっていく、その過程に注目しているのです。河合先生も、「事例研究の意義」（『臨床心理学ノート』2003 年）で

> 治療者自身が「固有の存在」なのであり、それが同じく固有の存在としてのクライエントに会い、そこに「関係の相互性」が生じてくるのだから、これは、一回一回の記述に頼らざるを得なくなるのも当然である。そして、その記述の際に、近代科学の場合は問題にならない「関係の在り方」に対する研究が重要になることも見逃すことは出来ない。

と述べ、その後、「深層心理学が始まって以来、今日に至るまで、転移／逆転移についての論議を盛んに行ってきたのはこのことを反映している」と書いておられます。

だからこそ、「固有の存在」としてのクライエントとセラピストの姿が浮かび上がってくる報告があってこそ、それを検討できるのではないでしょうか。

発表者はそのことを肝に銘じて、今後研鑽に励まれることを期待します。

編集後記　講習会や研修会といった検討の場に出たときに、これまでは自分とクライエント、もしくは少人数の中でやっていたことを、大人数の前で発表することになります。その時にこそ、自分が何を言おうとしていたのか、何をやって来たのかが明確になってくるのではないでしょうか。また、様々な機会に原稿を寄せていただき、多くの人に思っていることを伝えてもらえればと思います。

よろしくお願いします。　（仁里）

SPACE　No.44
日本臨床心理身体運動学会　会報第 44 号
2025 年 6 月 10 日発行
日本臨床心理身体運動学会
会　長　山中康裕
編集責任　仁里文美
事務局　〒600-8449
京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1
株式会社 木立の文庫内
TEL：075-585-5277
FAX：075-320-3664
E-mail：office@rinsinsin.jp